

せたかむい

年表で読む 古平の歴史

[119]

古平町役場総務課
842-2181(代)
平成19年7月1日

商工業 ⑥

商
業

◆劇場の建設

（続く）

株式会社として劇場を經營することになり、一株五〇円で資本金四千円とし株主は次ぎのようであつたが、浜町の商店主が主な株主であつた。

土谷久太郎 高野豊吉 梅野富蔵
竹内ハツ 瀧原宗四郎 久須美正助

松井栄五郎 高野平治 寿原栄吉
原田吉太郎 仲谷末三郎 関口昌
松尾市三郎 田岸貞治 宮地金吾

中村源次郎 平泉久吉 嶋野八ナ
高野名石藏 米田惣太郎 梅野角
藏 名達文吉 本間禮太郎 下野弥
三郎 八反田寅吉 吉野藤五郎

小林清次郎
一一七名

共同土谷座は廻り舞台を設置した二階建てで、浜町では唯一の娯楽の殿堂として親しまれ利用された。

毎年十一月三日の天長節（天皇誕生日の祝日）には歌舞伎などを上演し、共同土谷座建設記念日として正月興行として演劇を発表したこともあつた。

歌舞伎は人気のあった市川八百蔵、沢村延若、市川黒猿、沢村千鳥らが毎年のように来演し、新派の原良一、関定雄、山本長作一行外が来演した。山本長作は古平町の出身で太郎は市川團松という俳優を専属の座員とし、芝居などでの大道具や小道具を作らせていた。

共同土谷座が建設されてから間もない頃、関口昌が提唱して青年素人劇団を結成した。これに高野名

写真は明治三十一年頃と思われる新地町・丸山町・入船町の町並み
↓印が焼失前の新地座、その手前
が郷社夢平神社、広場は身欠の納屋や鍛冶の工場である。

幸作、八幡平太郎、竹内厚、長嶋繁太郎、宮本龍次郎、平野梅吉らが参加し、壯士劇や歌舞伎を上演し、たまたま日露戦争中であつたので軍人家族慰安、軍人家族援護資金募集なども行い、明治四三年元旦には、旅順陥落五周年を祝し青年演芸会を開催した。

同年一月、勧進元である土谷久太郎が死去したことから、古平共同

土谷座は総会の決議により三月に解散することになり、その後、土谷

八十八が個人經營する土谷座となつた。その頃、町内の演劇愛好家で

ある登秀次郎、梅津三次郎、渡辺吉郎らが市川團松の指導を受け、

正月興行として演劇を発表したこ

ともあつた。



あり、古平に親戚のある関定雄と共に大変人気があった。

これより前の明治三七年一月、新地座が失火によって焼失し、その焼け跡に古盛座が新築された。一般的興行の外に芸妓連の演劇発表会が上演されたが、年中行事のひとつとして大いに人気を集めた。

← 新地座で公演の青年会演芸云々



で濁酒を造り、行事や祝いごとに無くてはならないものであった。

島津二郎・田島文蔵
新地町

三木正兵衛・川島専蔵・安田平治郎・鳥山豊吉・島山□□・奥山□□
明治二二年、新地町の酒造店から次のような広告が配布された。

八角慶三郎

以上 一七名

ほとんどの業者は浜町で、当時

清酒発売広告

一 諸緒益御清福に被為奉御賀

も良いことから、醸造業にも好適

であつたことがうかがわれる。

これらの業者についてはこれ以

上のことを知る資料がないが、製

造石数から見て副業的なものが多

かったのではないかと思われる。

明治八年から酒税が制定され、

さらに明治一二三年には酒醸造税が

布告になり酒造業界にはこれに反

対する動きがあり、古平の業者は

一二月には全員が廢業届を出して

いる。

その後のことについてはあまり

資料が残されていないが、明治一

五年の「原田久吉日記」に次のよ

うな記述がある。

十一月廿八日 晴天、古平方面酒造

が始められ、醪の検査を受けたのは

次の大名である。

次の大名である。

安田平五郎・関川常蔵・島中駒藏

木村文助・鵜沼喜三郎・川島専蔵・

松田作吉・石田菊治・本間喜五郎

・夏堀季治・西柿友五郎・千広為明・

早くから住んでいたアイヌの人

たちは酒を好み、アワやヒエなど

で濁酒を造り、行事や祝いごとに

無くてはならないものであった。

和人が往来するようになり、やがて住み着くようになると米で造つ

た酒の味を知るようになり、漁獲や狩猟などの獲物と交換しては呑むようになった。

大正年代まで港町の高台に住んでいたアイヌの夫婦は、練漁期に

なると米で濁酒を造り、浜で漁夫たちに売つて生計の足しにしてい

たと、港町に住む或る古老が話して

いたことがある。

明治になつてからは古平への出稼ぎや漁業者の定住する者が増え

ると、酒類の需要も急速に多くなってきた。これに目をつけた商人たちの中には、いち早く濁酒製造に着手する者が現れて、明治一三年頃には濁酒・清酒を合わせて一七軒の業者がいたが、製造石数は二石から一〇石程度の何れも小規模なものであった。

浜町

安田平五郎・関川常蔵・島中駒藏

・松田作吉・石田菊治・本間喜五郎

・木村文助・鵜沼喜三郎・川島専蔵・

・夏堀季治・西柿友五郎・千広為明・

早くから住んでいたアイヌの人

たちは酒を好み、アワやヒエなど

で濁酒を造り、行事や祝いごとに

無くてはならないものであった。

◆醸造業

早くから住んでいたアイヌの人

たちは酒を好み、アワやヒエなど

で濁酒を造り、行事や祝いごとに

無くてはならないものであった。

早くから住んでいたアイヌの人

たちは酒を好み

▼七月八日

三日間続いた雨も今日は青空になつた。郷社の祭礼も明日に迫つた。この天気まわりで良いお祭りになるだろう。町中には大国旗七本も立つた。夜は軒下に電球の入つたちようちんがつけられ、国旗の下には大電球がついてお祭り気分も盛り上がつてきた。

▼七月一〇日

郷社の祭礼だが、昨日からの暴風がなかなか止まない。郷社へ参拝に行つたが、後志支庁長が供進使として参拝し、厳かな儀式であつた。夕方、西の宮神社へ行き供物を支度する。八時頃、御輿が神社へ帰る頃停電になつたが間もなくついた。夜は当番で御神酒を出したりする。今干場では泥の木の踊りがあり賑やかであった。

▼七月一一日

農園へ行つてサクランボの初もぎをする。九時、西の宮へ行き行列のお供役をする。天気がよくお祭りも賑やかだ。

▼七月一五日

祝聖会例会、今日は和尚さんが

アメリカへ行かれたとかで留守、集まつた会員で読経し茶菓を頂いて六五〇くらいあつたという。浜は海水浴の子供たちで賑やかだ。

▼七月二六日

今日は後志青年団連合運動会である。七時頃花火が上がる。一〇時頃に子供たちを連れて、余市、大江、赤井川、美國、積丹方面から選手が百人余り来だが、

ツポツと始めている。今朝は一隻飛ばされたといつて騒いでいる。

▼八月四日

農園のリンゴも大分落ちたようだ。トウキビも折れたのがあると

いう。祝聖会例会、四時に起きたが東の空が幾分白み始めている。禪源寺では種田さんが寄付した観音堂の工事に取り掛かるため、二〇日に地鎮祭をすることと、観音講の老婆連が集まつて地固め祭を

することだらう。午前一〇時頃、四五人で農園へ行き花を見てから公園へ行く。だんだん手入れして良くなつた。①公園はさすがに立派になつた。池があるので見栄えがする。

▼八月一五日

和尚から観音滝参拝のビラを頼んで一五枚ほど書く。一時から惠比須神社の祭礼の相談がある。

高野名古屋作さんの日記から 当時の世相を見る

<126>

▼七月一九日

古平は一向に振るわない。

▼七月三一日

朝から雨が降つたが作物には実よい雨だ。夏のこの頃には珍しく海が時化ている。イワシが不漁だつたので、代金も二割ぐらいしか入らない。

▼八月三日

出席を二〇人に増やして袋掛けだ。午後一時から木材会社の総会があるので行く。

▼七月二五日

出面を二〇人に増やして袋掛けだ。午後一時から木材会社の総会があるので行く。

▼八月一七日

和尚から観音滝参拝のビラを頼んで一五枚ほど書く。一時から惠比須神社の祭礼の相談がある。

本年も余興、その他盛大に行なうことにする。本陣の浜では盆踊りがあつて賑やかだ。

▼八月一九日

今朝はイカが大漁で三〇〇～八〇〇とったという、期待できる。

秋イカで大きい。イカの道具が急に売れ出す。

▼八月二〇日

土場で競馬があるといふので花火が上がる。子供らが見に行く。

恵比須神社の祭礼が明日からなので、それぞれ支度している。町では大国旗などを立て賑やかになつた。入船町の盆踊りを見に行く。

▼八月二一日

恵比須神社祭礼で町内は賑やかだ。禪源寺の観音堂地鎮祭のどしきあり、観音講の婆さん連が赤じゆばんを着てやるといふので、エライ人気だ。一時頃行つて見たがまだ昼休み中だったが、本堂の中で盆踊りをやつていた。何と賑やかで元気なものだ。後まどづきが始まる。恵比須神社に参拝したが、泥の木の豊年踊りがあり、おはやしも賑やかに練り込む。七時頃から神社前の大通りで活動写真があり、大勢の見物人

だ。一〇時過ぎ終わる。

▼八月二二日

お祭りで町には国旗やちょうちんが飾られ、郷社のお祭りのようだ。渡御があり、昼前、泥の木まで行つたが途中から小雨が降り出した。幸い大した雨にならなかつたので予定どおり歩いた。泥の木豊年踊りがあり、七時半、神社に安着した。

▼八月二三日

神社の後始末をする。米四俵、賽銭一四円ほどあつた。

▼八月二十四日

今日から招魂祭が始まり、町出身の現役兵二〇余名が休暇をもらつて帰郷した。

▼八月二十五日

招魂祭本祭の日で小学生も郷社に参拝に行く。在郷軍人会も参拝の後、銃剣術大会や、子供の相撲大会などがある。イカ漁は今どころ二〇〇～三〇〇とまあまあの漁である。夜、禪源寺で観音滝例祭のことについて相談ある。

▼九月四日

タイムスに種金の孫豊太氏と芸者に関する記事が出でた。

▼九月五日

禪源寺観音堂の建前が行なわれた。午後三時から禪源寺で山本厚三、沢田利吉代議士の政談演説会があり、本堂いっぱいの人であつた。七時に終る。大いに新知識を得た。

▼九月六日

道庁道路課長外七名の一形が、

りの天氣だが朝早くから参拝に行く人が通る。自転車で出かけた

町した。町長ほか関係者が余別まで陸行し案内した。この分だと自動車道路も近年中に実現するかもしれない。

▼九月九日

港町で漁場を整理するところが

あり、貸し方が一〇数名集まつて

協議した。結局、六割ほどの入金

で話しがついたが、これからは貸し方については大いに警戒しなければならない。

▼九月一一日

禪源寺の観音堂も骨組みが出来上がり、今日上棟式をやると

いう。正午からの上棟式で、読経ののち餅まきがある。イカ漁は

のどころ二〇〇～三〇〇しかないのでさびしい。カムチャツカの出稼ぎか

ら帰つて来る人が多くなつたが、

今年は大漁であったという。イカ

は函館方面も大不漁とのこと、漁夫も海産商も大打撃だ。出稼ぎ

に來ている漁夫は帰る旅費も無い

という。

▼九月一七日

今年は野菜が不作で農家も困るだろう。農家のカラスも例年になくせわしい。これもイカ漁がな

いせいかもしけぬ。夜、新場・渡辺

さんの通夜に行く。二二歳の娘さんが亡くなつたとのこと、若いのに氣の毒な」とだ。渡辺さんは昨年主人が死亡、間もなく若主人も死亡、その後弟も亡くなり、二年間に四人も死亡した。實に不幸続きでお悔やみの言葉もない。

▼九月二一日

今日は十五夜さんなので、畠方面から大勢の人がいろいろなものを持ちに来る。二階にお供えをした。去年はあいにく曇りだつたが、六時半頃になると満月のお月さんが昇つて来た。

▼九月二四日

彼岸の中日なので、お寺では朝早くから鐘を鳴らしている。大謀は鮭がポツポツ獲れるというので元気がよい。

▼九月二六日

リンゴは青森はじめ余市なども大豊作で値段も大暴落。もつたないような安値だ。イカは大不漁、畠作物は不作と少しも良いところがない。市況は大不況だ。数の子なども高値で買い付けた人は七割ぐらいに暴落したというから、大変な損害だ。

▼九月二七八日

大謀の鮭はいくらかずつは獲れているようだ。島泊から建物を貸すから建網をやつてみないかといふ話があつたが、自分らには不向きのようなので断る。

▼九月二八日

水田も不作のこと。今年は何の業者も悪いことばかりだ。ますます不景気だ。この分では一二月

う三月の間の景気が思いやられる。美國でも先頃建物の入札があつたが不調で、さらに入札が行なわれたという。これでは浜はだんさんさびれる。

▼九月三〇日

雨が続いて畠の収穫も出来ない。不作にこの雨、ますます悪い。リンゴを方々に配る。今のようなムチャクチャな相場のときは、人にくれた方がよい。

▼九月三一日

鉄道測量のための技師ら一行が古平へ来る。この日、町長、

困りの主人ら有志が出迎える。祝聖会例会、寒い朝だ。新築中の観音堂、六分通り出來ている。五〇余坪で一万五千円ほどかかるといふ。立派なものが出来るだろう。

種田さんが観音堂を寄付したこ

とで、本山から感謝状とそれに添えて金欄の打敷きが贈られるという。寺に届いているのを見せてもらつたが、実際に立派なもので、古平へ着くと思っていたのに残念だ。再び小樽へ上陸し、昼過ぎ

ストーブの実演があるというので見に行く。改良されてなかなか良いわかつた。一つ買わねばならない。夜になつて天気が荒れる。

▼一〇月五日

浜へ出で見ると大謀が網起しをしている。この頃はひと起しで五〇〇～六〇〇円あること。

大謀から一、七〇〇円、美國

から一一〇円余りの入金があり

大いに助かる。昨日から鉄道省の測量隊が来て、鉄道予定地の測量を始めている。わが家の畠付近からアユ孵化場、(平)、若松、松田の畠などを通つている。この分

なら順調に一〇年以内に出来る

▼一〇月六日

雨で古平川が増水、土場では水が床上まで上がり大騒ぎしている。夕方になって雨が止む。

▼一〇月一一日

小樽へ出でたが、ちょうど前浜

から勇丸が出帆するというので乗り込む。共栄丸も同じ頃出帆

したが、祝津辺りまで行き時化で引き返すことになった。九時頃にまた立派な建物になつた。外浜丸で余市を出帆、三時に古平の汽車で余市へ着き、一時半、外見に行く。改良されてなかなか良いわかつた。一つ買わねばならない。

浜丸で余市を出帆、三時に古平に着いた。

▼一〇月一二日

この頃の朝の寒さは格別だ。積丹岳が白くなつていて、朝方は晴れていたのに夕方から雷鳴があり雨になる。実によく降る雨だ。

▼一〇月一三日

八時頃から暴風になり、雨もまじつて海は大時化になつたが、間もなくアラレになつた。ヨの寺参

りなので宝海寺へ行き、墓へもお

参りする。禪源寺の観音堂の工事

が終り、実際に立派な建物になつた。

丸は、古平に向かう途中時化のため忍路へ向かつたが入港できず、

また古平へ向かつた。だがハシケを船に着けることができず、水難

救助会などが出て大騒ぎ、ようやく大謀の大ハシケが出て乗客一

八名を無事上陸させたという。

大変な時代だった。

▼一〇月一五日

祝聖会例会、朝早く起き、声高くあげる読経は心身によい。観音經をあげたが本堂での読経は今回限りで、次回からは立派に新築された観音堂であげることになった。和尚の部屋で、一七日の観音滻参拝の打ち合わせをする。久し振りの晴天だが寒気がきびしい。明日は衛生組合役員会の観楓会だが晴天を祈っている。

▼一〇月一六日

支店烟で観楓会がある。寒空だが晴天である。晚秋の農園の景色はまた格別な眺めである。一行七〇余名、池や庭木の景色を前にゴザを敷いて、鮭汁、鯉汁、かしわ汁などに酒、リンゴと大いに飲み食べた。帰りは①公園の眺めを楽しんだ。

▼一〇月一七日

観音滻参拝もこの雨ではできないだろうと思っていたら、和尚は馬車で行くという。参拝者は「ぐ僅かであった。

▼一〇月一八日

禅源寺観音堂の入仏式なので、朝早くから鐘の音が聞こえる。十

二時半お寺へ行つたが、参詣人や物売りの人でいっぱいだ。本堂も満員である。一時から始まつたが僧侶一三人、稚児の男女六〇余名、観音講中一〇〇余名の行列でお寺中を回る。四〇分ほどで終り、新築の観音堂で大般若經をあげ、一同記念撮影をして三時過ぎ帰つた。近年にない盛事であった。お金もこうして使えば有用なものだ。

▼一〇月一九日

鉄道の經濟調査に二名来るといふので、沖村街道を一〇余名で出迎えに行く。途中歌葉の浜で過日の大時化で正大謀が流失したのでその準備をしている。△大澤まで行つたら、一行はすでに到着していて昼食の最中であつた。結果が出ることを期待したい。

▼一〇月一〇日

所得税、營業税調査員選挙日で、主人が候補者になつてゐる。父は投票に行く。

▼一〇月一一日

昨夜はよい夜であつたので晴天ならんと思っていたら、夜中の三時頃から雨が降り出した。六時

車を町中乗り回している。子供らが珍しがつて走つてゐる。古平消防組の自動車積載のガソリンポンプが到着。試運転に自動車が珍しがつて走つてゐる。古平火防の新威力だ。

▼一〇月一二日

正治をだつとして浜へ出て見る。海は珍しい上ナギ、今日は長慶天皇が歴代の天皇に新たに加わることになった日だ。奉告祭があるので学校や官公庁は休みだ。大根抜きをせねばならぬと、妻は子供たちを連れて農園行き。いつも昼食は四、五人だが、今日は子供たちもいて賑やかだ。夕方、妻は子供らを連れて帰る。近年稀な暖かいよい日であつた。

▼一〇月一二三日

四時に起きたが辺りはまだ真っ暗、浜へ出て見たがなかなか夜が明けぬ。五時半頃から漸く明くなる。農園を見回る。一号は玉も良いが、四九号は小さいようだ。夏の間元気に咲いていた花もこの寒さで皆しおれた、菊の花だけが元気よい。午後から雨に風がまじり、海も荒れ模様になつた。ガソリンポンプ車が本陣の川で試験を行つた。

頃には晴れた。かねて買い求めた古平消防組の自動車積載のガソリンポンプが到着。試運転に自動車を町中乗り回している。子供らが珍しがつて走つてゐる。古平火防の新威力だ。

▼一〇月二四日

今日も雲り空で時々雨が降る。大阪のおじさん、今日出発されるとのこと、ずいぶん長く滞在された。浜まで見送る。浅野でも回漕店を始めると看板を出した。保木と競争になる。午後から雨の後にアラレが降り出す。三時頃からガソリンポンプ車が沢江の橋のうえで試験をするとて四郎、悦三を連れて見に行く。機械の威力はなかなか、一本のホースから水が勢よく出る。夜、丸一八幡主人の通夜に行く。四七歳といふまだ血氣盛りだ、惜しまず。

▼一〇月二五日

今日も雨、リンゴの保管に熊さんと倉の片付けをやる。来る二八日、亡母の七回忌につき仏事の支度をし、招待状を書く。雨は夕方まで少しも止まずに降る。農家では収穫もできずに困つたものだ。本年は冷気に加えて九月から雨が多く、菊の咲き具合が悪い。この天気は札幌の測候所始まつて以来ないそうである。

内閣の新地小学校

◆ 教育の充実に向けて

落成後的新地分校では、祝賀協賛会(会長本間権平)から全校放送施設一式の寄贈を受け、毎朝八時三〇分から四〇分まで校内放送の時間としたほか、日常の学習活動の中に積極的に放送を取り入れた。学校運営の重点として、「学校教育放送の実践研究」がその中にあげられた。

その後の昭和三三年、NHKから学校放送教育研究の委嘱を受け、翌三四年一一月、後志学校放送教育研究集会が開かれた。

また祝賀協賛会、丸山町内会、PTAからは、屋外の遊具施設が寄贈されたほか、個人から梅・

松・銀杏・桜などの苗木も寄贈され、PTA会員や児童、教職員の手によって校庭周辺に植えられた。

◆ 古平小学校に統合

校舎の老朽化がいたるところで見られるようになり、屋内運動場は床の破損などもあり児童への危険もあることから、昭和三八年四月一日、新学期をまつて本校に統合されることになった。

すでに「れより前、古平小学校の新築が決まり、これによつて町内の各小学校を古平小学校に統合する計画があつた。統合を想定して新校舎の建設が進められ、統合する地域の父母や住民に対し



本校で行われた七十七周年
←記念学芸会

ての説明会などが行われていた。新地分校は位置としては本校に近く、学校間の距離は約二・五キロ、しかも従来から四年生か五年生からは本校に通学していたので、統合については特に強い反対もなかつた。

全国的にも児童生徒数が次第に減少したこと、それとともに学校運営上の諸問題をかかえ、全国的に学校統合の方向へと進んでいた。このような事情から現状

統合時の児童数は二〇六名(男子九六名・女子一一〇名)六学級で、これは分校としては全道一の規模である。

古平小学校校舎の新築落成により、先に統合した新地分校に統合、小規模校の解消、整備された学校環境での教育を念頭に、沖縄和両小学校も昭和三九年九月、古平小学校に統合した。昭和三八年四月から、町立古平高等学校の校舎となり増築改裝されたが、高校が道立移管となつて現在の新校舎に移つた後は廃屋となつていていた。

その後建物は、町民の輿望をうつてあるびら温泉一望館として復活し、民営移管となつた現在も町民の健康管理と憩いの場として、また町外の愛好者からも景観と優れた泉質で好評を得ている。

古平小学校

①

◆古平に和人が住み着く

蝦夷地では稻作が出来なかつたことから松前藩では家臣(上級の

家臣に限られた)に土地(場所)を貸し与え、そこで土地のアイヌの人たちと交易(物々交換)をさせ、それを松前に運んで来て商人に売り、その利益を家臣の給与としていた。古平場所と言われていたのは、海岸線で見るとほぼ現在の古平郡の行政区域に相当する地域である。

古平場所の経営は、その後家臣たちに代つて商人(古平場所は岡田家)が請け負う仕組みに変わり、このような蝦夷地での場所請負制度は明治の初年(明治二年、開拓使によつて場所請負制度は廃止になる)まで続いた。

商人による場所請負制が始まると、漁場での生産を上げるために各地から和人が入り込むよう

になり、越冬する人員は限られましたが、漁期の人口は次第に増加してきました。

◆市街地の形成

労働人口が増え、漁獲高も上がり生活も安定してくると移住者はさらに増え、安政二年(一八五五)、神威岬以北への婦女通行禁止令が解かれるなど、急激に移住者が入り込むようになつた。多くは海岸近くに定住し、人家が軒を並べるようになり次第に市街地が形成されていった。一方では市街地に近いところで農業を営む者や、奥地に入つて農地の開墾に当たる者もいた。また、遅れて本州から団体で開拓団として移住して来る者も多く、それらは古平川流域に散らばつた。

◆子弟の教育

郡内の人口の増加につれて、何

らかの教育を必要とする子供も増えてきた。これは今までにない事態なので、本州でも一般に行われていた寺子屋式の教育が行われるようになったのは当然で、僧侶や神官、読み書きに心得のある人が暇を見ては教えていたと伝えられている。

当時、新地町には禪源寺の天山和尚、漢方医の熊谷昌庵、浜町には西本願寺出張所、新地町と浜町には剣道指南所があり、これらのことでは読み書きや算盤(そろばん)を教えていたと思われる。

◆教育所を開設

明治六年、東本願寺札幌別院から宝海寺(東本願寺管刹所)に招かれ寺務を行つて大岡良周と佐久間有三が、教育所を開設して子弟の教育に当たつたところが、場所などについてはほつきりしない。

明治五年(一八七二)初めて学制が定められたが、北海道ではようやく開拓が始まつたという時期であり、学校を建ててすぐにも教育を行うという状況ではなかつ

た。その年の一一月、開拓使から次のように達しが出た。

「この度各村へ筆算教師を置き、広く教化を施すことになったので各子弟を入学させ、その親に対し

て督勤をすること。そして教師たる者はよく今の時勢をわきまえ、

開拓の趣意に基づき、自分の職業を失うことのないよう有用な学

に努め、急務の術を修めるよう心がけること。

一、農夫は農事を努めるのは当然のことであるが、文字を知らなければ

← 寺子屋で使われていた当時の書き方手本

抱 笠 鹿 機 橋 捅 等
桺 桧 等 指 笔 葵
狗 板 漆 厚 松

「穢が少ないので、もちろん、達しの文書も了解することが難しく、時には罪科に問われる」とにも、「びんないので、よくこの趣意を得る」と。

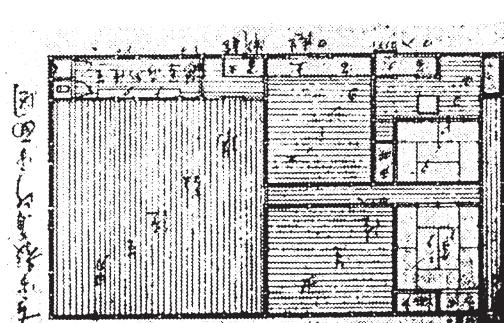
「学校は村の中で便利な場所を選んで、村中で力を合わせ建設する」と。教師の住宅についても建てるとはかまわない。

要するに「教育を受ける」とは将来大事なことなので、子弟は皆学校へ行かせる」と。ただし学校を建てるのはその村でやること。
教師の住宅についても任せると、うことで、制度はできだが開拓使にも金が無いので、貲蓄協力(合力)ということがある。

◆古平郡教育所

『北海道誌』の学校の部に「浜中に明治六年設立」とあり、札幌本庁古平出張所文書の中に、

明治七年北川誠一在勤中、浜中村真宗寺留守居役ノ僧石塚賢



← 古平郡教育所平面図

「学校は村の中で便利な場所を選んで、村中で力を合わせ建設する」と。教師の住宅についても建てるとはかまわない。

要するに「教育を受ける」とは将来大事なことなので、子弟は皆学校へ行かせる」と。ただし学校を建てるのはその村でやること。
教師の住宅についても任せると、うことで、制度はできだが開拓使にも金が無いので、貯蓄協力(合力)ということがある。

◆教育所での教育

明治八年、教育所での教科書については物語代(郡内地域の代表者)から願書が出され、この年、次のような教科書が生徒に貸し出された。

- 博物新編
- 小学読本
- 地理初步
- 日本図志
- 地学事始
- 単語編
- 女大学など

ればむなしく、力を尽くしても収穫が少ないので、もちろん、達しの文書も了解することが難しく、時には罪科に問われる」とにも、「びんないので、よくこの趣意を得る」と。

「学校は村の中で便利な場所を選んで、村中で力を合わせ建設する」と。教師の住宅についても建てるとはかまわない。

要するに「教育を受ける」とは将来大事なことなので、子弟は皆学校へ行かせる」と。ただし学校を建てるのはその村でやること。
教師の住宅についても任せると、うことで、制度はできだが開拓使にも金が無いので、貯蓄協力(合力)ということがある。

藏ヨリ、別紙出願ノ趣モ有之、聞届相成、以後右寺院教育所ト致シ…(中略)

明治六年、余市開墾場カラ堀太冲ガ來テ、新地町に手習イノ子供四、五人ヲ集メ教育ヲシティタガ、明治七年、浜中村寺内ニ教育所を建テ、堀太冲ハ助教師トナル。

明治九年、新教育所ヲ新築ス。

とあり、教育所を建てた頃から寺子屋式の教育は統合されたと考えられる。

開拓使古平出張所詰少主典福

沢真祺は官舎の空き家に教育所を設置し、官費で教員を雇い入れる」とした。

開拓使事業報告に「七年官舎を以て仮教育所とし」とある。
(当時の伺書が残されている)

明治七年の町内の出生は男子十五人、女子九人、計二十四人とある。就学する子供の人数も年々多くなり、教育所の設置に迫られていたと思われる。

「このような教育所は後志国は七ヶ所、外では札幌一ヶ所、石狩五ヶ所、日高三ヶ所、胆振四ヶ所の計二〇ヶ所で、練漁で繁榮した後志、鮭、こんぶ、木材などの産業基盤をもつ地域に限られている」とがうかがわれる。

←『小学読本』と『世界図志』
福沢諭吉著
明治七年八月改訂



ライラック物語

大澤文子

雨あがりの爽やかな朝のこと……

「えつ？ なに？」 思わず声をあげたわたし。
わが小庭の片隅に丈高く茂り葉を見せ、白い花を咲かせる梅花うつぎの大木は、毎年私の楽しみのひとつだった。

だが……この朝丈高く伸びたつ梅花うつぎの茂り葉のかけに、からまるような細い枝が幾本も見え、うす紫の小さな花房が……えつなりに？ どうして？ 思わず小庭の隅に立ちすくんだままのわたしだった。

でもどうして？ あれから二十余年は経っているであろうに、記憶の糸をたぐるのに……そう時間はかかるなかつた。

小庭の隅に立ちすくんだまま

六年の頃であつたらう

あれからに十数年経つた今

丁目七九五番地に居を構えていた父の面影がいま……ふつぶつとよみがえてくるのだった。花咲きの父の庭にはいつもライラック、向日葵、朝顔、萩種々の花木が咲きほこっていた。

いつの日か父は、「古平の庭にも札幌のライラックを咲かせなさい」と、三十センチ位の幼な木があつた。

私はたつた今……この爽やかなこの朝陽のもとに愛らしく咲きかけているライラックの房花を見つけていた。

そして昭和五十五、六年頃の父

「ありがとう」……と。
「うん、よしよし！ 命終るまで

花に触れ数えてみた。繁り葉のかげに十八房もの花房を見つけ、大切に植え、花咲くを待っていたはずだったのに……。数年海風にさらされていた幼な木は、札幌の庭土にも馴染めなかつたのか……。

いつか私の記憶もうすれ、忘れるともなく忘れ去り思い出すことさえなかつたのだ。

「おー咲いたかア、よかつたなア」祭壇の父の笑顔が私に問い合わせているようでうれしかつた！

「私は今、この『ライラック物語』を書くにあたり、本棚から数冊の大辞書、それに大好きな水原秋櫻子氏編の季語集などをひつぱりだし調べてみた」

リラ、ライラック、紫ベシドイ、モクセイ科の落葉低木、ヨーロッパ産、紫淡の筒状の細い花、香気つよい等々。

呼び名もそれぞれの国で、それの名で賞でて楽しんでいる花……であることを知り、それも亡き父のおかげと祭壇の父に呼びかけてみた。

「ありがとうございます」と。
「うん、よしよし！ 命終るまで勉強！ 勉強！」

なんて父の厳しい声がきこえそう

れていくのだった。

昭和六十三年頃には私共一家

頭の中は歯車の如くからかと音になつたのだ。勿論引越しの荷物と共にライラックの幼な木も大

切に車に積んできたのだった。た

だちに札幌のわが小庭の片隅に大切に植え、花咲くを待つていた

はずだったのに……。数年海風にさ

この朝、早速咲きほこるひと房を手折り、祭壇の父に供えたのは言うまでもない。

花に触れ数えてみた。繁り葉のかげに十八房もの花房を見つけ、大切に植え、花咲くを待つていた

思わずうれしい！ と声をあげた。

群来村・相内米藏漁場



相内米藏は明治二二二年、群來村分教場建設際に際して建設費と
して金五〇円の寄付をしています。これは先の明治三

年年の練の売却代金一

明治二十二年十二月五日

白崎弥吉 費トシテ右正ニ受取候也

一金五拾円也

証

収獲高と売却代金調べ

古平町内の練漁についてのいろいろな資料はあります、練漁期の収獲高、収入の内訳についての資料は、の一点です。

明治三三年の『古平郡練建網漁場位置図』によると、厚苦岬から順に第一〇二号までの建場があり、第二号建場は厚苦岬のすぐ側で刺網をしていました。

練漁などの免許漁業については、明治三五年から『免許漁業原簿』が作られそれによつて知ることができます。相内米藏の第二号建場はそれ以前の番号ですが、原簿ができるから第二号建場は相内卯作の名義になつていて、大正四年(放棄)となつてから漁場は開かれていません。古平郡の漁場の境界線は同じなのに大正五年には、建場の数は二〇七か所にも増えましたが、建場の番号には全く順序はありません。

計	胴 錄 東	七四五東	四〇九円七五銭	身欠練 一本目方		石 三七円二斗五升	販賣總額
				壳	却		
計	五三石五斗一升五合	六八九円七五銭	販賣總額	石	一六石二斗六升五合	販賣總額	五〇円余りの三分の一
計	五石九斗四升	四三円六五銭九厘	販賣總額	石	七百四拾五束	販賣總額	も山林の經營なども積
計	四石八斗五升	七八円五七銭	販賣總額	石	三百七十五升	販賣總額	極的に行なつていたよ
計	二石五斗一升	三三円六二銭	販賣總額	石	五百六十本	販賣總額	うです。
計	一三石三斗	一五四円八四銭九厘	販賣總額	石	七百六十八束	販賣總額	以下余白アリ

納稅委員 松尾市三郎殿
相内米藏

古平郡クキムラ拾九番地

明治三三年八月廿五日

右ハ明治二二二年四月三十日迄收穫高並代金 通し相違無之候也	相内米藏	白子	鰯鮪油	計		販賣總額	代金
				身欠練	一本目方		
右ハ明治二二二年四月三十日迄收穫高並代金 通し相違無之候也	相内米藏	白子	鰯鮪油	五百六十本	七百六十八束	五百六十本	五百六十本
右ハ明治二二二年四月三十日迄收穫高並代金 通し相違無之候也	相内米藏	白子	鰯鮪油	五百六十本	七百六十八束	五百六十本	五百六十本
右ハ明治二二二年四月三十日迄收穫高並代金 通し相違無之候也	相内米藏	白子	鰯鮪油	五百六十本	七百六十八束	五百六十本	五百六十本

水見悠々子 従軍句集

「廬山」復刻版が刊行

先づ、水見悠々子の処女句集である『廬山』の復刻版を頂戴しました。句集のことは知つてますが手にしたのは初めてです。

落ち着いた装丁ですが開いて見て、硝煙立ち込める中国の山野が迫つて来るようなその迫力に、俳句を解する如何にかかわらず思わず圧倒される思いでした。激烈な砲火に身をさらし、生死の境をさまよい、過酷な戦場を体験した人でなければ詠めない俳句ではないかと思いました。またその中で、

極度に緊迫した戦陣の中に垣間見る、土地の人々との平和なひと時の交遊には、ほのぼのとした安らぎも覚えました。

戦争体験の有無に関係なく、戦争という悲惨さを容易に目に見えることができる現在、強烈なメツ

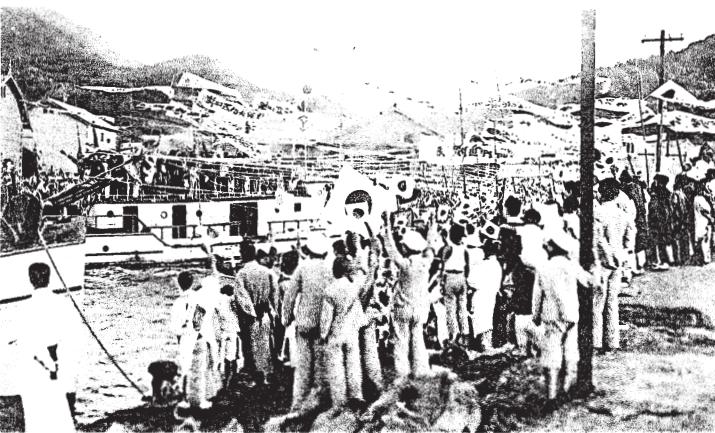
悠々子は以前から「魚の俳人」という異名をとつていましたが、古平町に句碑が建っている高野素十のことは知りませんでした。早速、水見さんに葉書でお知らせしたところ、「その本を買いたいので出版社を知らせてほしい」とのことでしたが、その後、「出版社にも問い合わせたが、その本はもう在庫が無かつた」とのことでした。

五〇年頃、『百魚歳時記』(上巻)という本の「本鮪」の項に、悠々子と高野素十・高島茂の三句が載っていました。この本は日本近海の主な魚を隨筆風に紹介し俳句を添えています。

余談になりますが：確か昭和五〇年頃、『百魚歳時記』(上巻)の項に載つていた句は、「本鮪」の項に載つて、鯛揚ぐ沖曼陀羅に西雲

かつぎたる大いなるもの鮪竿
素早くさばく鮪濡れ身に旭(ひ)
がはいく
高島 茂

↑ 復刻版水見悠々子
従軍句集『廬山』



卷頭の一句を紹介します。

古平港出帆召集地に向ふ

テープ皆切る、にはやし秋豪雨
国旗(はた)振りてわが子とおぼし濱の秋

水見悠々子
廬山



辺を笑ひの

樺太漁場体験記

吉野慶一郎

私が急に引き上げることになったことを聞いて「それは大変だ」と、急遽応援に駆けつけてくれて、一番手数のかかる面倒な作業から取り掛かつてくれたことに驚くと共に感謝するばかりです。

次は家の中の整理ですが、何から手を掛けたらいいのか?今は一切を潔くあきらめて、居抜きのまま裸で引き揚げるより致の方ないと決断するのに、時間はさしてかかりませんでした。

仕事の手伝いに来てくれた人たちには、「もし必要な物がありましたら、遠慮なくお持ちして下さい」と声をかけましたが、誰も手を出す人はありません。

「自分たちも何れ引き揚げるので、せっかくですが頂けません。」無理もないことです。自分の言葉を恥ずかしく思いました。住宅をはじめ仮塙、たんす、テープル、食器類、寝具、衣類、骨董品、レコード、夏冬の運動具などなど、われながら愚かしいことだと思いながらも、愛着があります。

「たつ鳥跡を濁さず」とか、こんな言葉を無理に当てはめて自分の気持ちを静めようとしていたのです。

交々として眼をつむりました。

しかし反面、亡父が築き引き継いだ商売の漁業や加工場の規模に比べたらもの数ではない。この遺産も幻と消えた今、この樺太の悲惨さを見ずに淨土へ旅立つた親父は、幸せだったかも知れないと喜んでやりました。

手伝いの人たちのお陰で家の中の整理も順調に進み、明日一日の余裕をもつて引き揚げの準備も完了し、叔父の家を訪ねました。叔母が病気入院中なので、今回私たちと一緒に引き揚げることができないため、三人の子供のうち小学生の男の子一人を連れて帰ることになっていたからです。上の女の子と夫婦は、容態次第で次の引き揚げ船で帰ることにして、叔母には「早く帰れるように元気を出して下さい」と激励し、祈るような気持ちで病院で別れたのが最後でした。その後一ヶ月後に、叔母は北海道に帰ることなく残念にも昇華したのです。

叔父と女の子(小学校五年生)が叔母の遺骨を抱いて帰国したのは、秋風の立ち初めるお盆の頃でした。話は元に戻りますが、叔母が入院していた病院の近くにある喫茶店の前を通ったとき、懐かしい昔のことを思い出しました。戦前、戦中と物資の続く間、ここは喫茶と軽食の小さなハイカラな店でした。店内には大きな電蓄が置かれ、いつも歌や音楽の新譜をかけてサービスし、可愛い看板娘を目当ての若者たちでいつも賑わっていました。私もアルコールは弱いのですが、コーヒーとレコードで憩う場所にしていました。終戦後は休業が続いている話す機会もなかったのですが、母親と娘さんの一人で静かに暮らしているようでした。

そんなことを思い出して、引き揚げで必要が無くなつたポーブル蓄音機と、持てるだけのレコードを手にして訪ねてみました。久し振りの対面でしたが、懐かしき良き時代の楽しかった思い出に話が大いにはずみました。そして「これらは最後に捨ててくれて結構です。自分の手では捨て切れないで、一日も長生きさせたいものとあなたにお願いに来ました。勝手ですがどうぞよろしく

生甲斐に学びし短歌究めゆく道はけはしく業苦にも似る
投げ出すなと言はれし言葉身の裡に宝の「」とく煌きやまず
涙ぐむ我にたしなむる亡夫なり「優子らしくない」と一言
一画を加えて辛を幸となす文字のあそびと雖どもおもし
引き出しに仕舞ひ忘れるしもつれ糸忘却はときに安息に似る
花の目の光るを見つつ春の日は独り心もゆたけきものを
若萌のけぶる林は花よりもほのぼのとして我を包むなり
ようやくにまとまりし歌に放たれぬ遠き松吹く風の音追ふ
紅梅の花の蕾に頬寄せてある日は庭に心を癒す
肌に沁む大氣清しきこの朝を深く息する喜びのあり

心のゆらぎ

瀧 内 優 子

くお願ひします」と頼みました。
すると彼女は、「吉野さんの家にはいいレコードがたくさんあるでしょう。私の聞きたいレコードもあるでしようから、帰国するまでゆっくり聞かせてもらいたい昔を楽しみます。ありがとうございます。」と喜んでお礼を言われ、彼女に感謝して帰宅しました。

姿かたちも明るさも変わらないようだが、かつての看板娘もすでに適齢期は越えているはずなどと思いつながら、一日も早く帰国が実現し、日本で母子共に幸福に暮らせる日の早く来る」とを祈るばかりです。

編集後記

暑い暑いと言つていたのも束の間、暦の上では『処暑』そろそろ秋風を感じる候となりました。もともと少しでていて発行もすっかり遅れてしまいましたが、月遅れの七月号をお届けします。

紙折機の調子が悪くて、何枚かが13・14ページにしわができてしましました。少々見苦しいのですが、賞味期限切れというほどでもない

こうゆう人たちがまだ引き揚げが決まっていないのに、仕事をしている私たちが先に帰国できるということは、何かが狂つているのは確かです。

規則や規制はおろか、順序も無視する狡猾な人間が幅を利かすソ連の内部を見る思いです。無力な下層階級の国民に陽が当たるのは何時のことか。スターりんを憎むあまり、ソ連人に同情する気持ちが湧くのも自分ながら不可解です。

今は、こんなことを考えるより仕事の片付けが先なのに…。

— 続く —

水見悠々子従軍句集・タイトルの『廬山』にルビをつけたのですがルビの一字が消えて、どうも格好がつきませんでした。お詫びいたします。書名の『廬山』(ろさん)というのは、中国の南部江西省にある山の名で、積丹岳より少し高く、余市岳と同じくらいの高さの山ですが景勝の地で、昔から文人たちに親しまれ名所旧跡の多いところです。中国の古い時代、有名な故事からもよく知られています。

悠

雜詠 「七月号」
主宰 水見壽男

如月の海や一帆水尾曳けり
羊蹄山の抱きし湖の汎返る
羊蹄山は遙か遙かや鳥雲に
春雷の音低く聴く遠く聴く
海猫騒ぎ舟出騒ぎや鯨群來
母の指す夕暮の空雁帰る
かすかなる夜の潮音水温む
歌声のテノールアルト春の山
春蘭を土産に友は山語る
流氷の軋めく声の底に哭く
流氷の国引く如く近寄りて
春の雷空ゆるやかに光りけり
日本海晴れ一陣の鳥帰る
荒磯を真夜に粧ふ春の雪
流氷を遙かに置きて海静か
黄水仙仄かな風の匂ひけり

越野清治

【句評】

山口悦子

越野敏雄

高橋重子

柔らかくなりし日の色名残雪
今は昔雪に埋もれし番屋跡
旅立ちの庭にうつすら名残雪
手分けして残雪処理し牧開き
知床に春の足音駆ける鹿

外山俊久

流氷を縫ひつつ網を刺し行けり
流氷に阻まれ船の軋みたる
流氷に船囲まれて動かざる
樺太に鈎追ひしも今むかし

堀典子

春北斗船窓に置く夜凪かな
行く雁の声を呑み込む百重波
程ぬくし素手で網干す男衆
港なき海を渡りて鳥帰る
追ひすがる風をぶり切り鳥帰る
鳥帰るのつべきならぬ風ありて

本間寿昭

【句評】

渡辺嘉之

荒くとも何處かがぬくし浜言葉
出港の刻を搖るがす霞濃し
轟を湾に置きたる春の雷
春雷や岬を転がる音遙か

室谷弘子

奴
詩

【二四】
—七月号—

吉
平
俳
句
会

漁火の空 海峽の朧月 越野清治
思い切り手を振る別れ鳥雲に
春暁の大地に喰る耕耘機 斎藤波留
裏山の初音聞けるも遠からず
夏暁歎声上げてハイヒール 山口悦子
みどり児の眉出揃ひぬ更衣
卯浪立つ水軍の船迫り来る 越野敏雄
床あげも終りて安堵更衣
うららかや湾染め上げしこめの群れ
誕生日ハワイにもある桜餅

大和田絵伊

河原風空に呑まるる吹流し 高橋重子
夏霞娘の住むはるか彼方まで 活けられて梅一輪がしゃべり出す 外山俊久
旅立ちの肩にひとひら終の雪 花水木力溢れて咲きにけり 堀典子
葉桜の折々こぼす紅の色 対岸に風と繋がる夏の雲 本間寿昭
磯漁や波と遊べる若葉風 麦秋に見惚れて雲の落ちにけり 渡辺嘉之
大空を五月の風と雲駆くる 緑縁を漏るる風音物の怪す 室谷弘子
緑縁に煩惱少し目覚めたる 虹立ちて湾に大橋架かりたる 仲谷比呂古
草笛や父の親指太かりし



吉平町岬短歌会



吉平俳句会

境内に春の日まぶし雪減りて松の走り根くろぐろと出ず

池田テル

山あひにひつそり眠る残り雪風を伴なひ里めぐりゆく

金子寿子

広々とみどり豊かなモエレ沼夕暮の空は茜の色に

坂本信子

子のくれし色とりどりのカーネーション八重のいく本夫に供ふる

鈴木時子

菩提寺の行事の合ひ間さまざま人間模様ふとかい間見る

田中香苗

雨上の煙に発芽の野菜みなみどりいとしく朝の陽に映ゆ

丹後初江

茶褐色の源泉湯で友と背を流しあふ外は初夏の日の差す

寺田カツ子

朝露に光り輝く水仙に草木萌え出る春の足音

仲谷喜美能

昨日一つ咲きぬしたんぽぽ今日の道十を数へぬ風あたたかく
音消して雨降る今宵静かなる刻の流れにもの思ひをり

堀典子

春暁の断崖を染め舟屋染め 越野清治
鯉のぼり石狩湾の風を呑み 斎藤波留
古里の友の目印の朴の花 山口悦子
連綿と瑞穂の国 の鯉幟 大和田絵伊
なによりも強き古草よみがえり はるかなる海より晴れて夏の寺
はるかなる海より晴れて夏の寺 高橋重子
雛壇に人形並べ童歌 外山俊久
麦秋の夕風重くなつてをり 堀典子
色こぼむ靄に浮き立つ白牡丹 本間寿昭
岬の灯卯浪に烟り点りゆく 渡辺嘉之
夏しかと風音潮目正しかり 室谷弘子
秀峰の雲ほぐれ行く夏空に 仲谷比呂古

古平町史年表

昭和32年 (1957) ~続き

8/5: 古平中学校野球部が後志管内中学校野球大会で初の管内優勝をし、町内をパレードする

8/16: 余市～古平間が除雪を要する道路に指定される

同: 中島グランドで鞆馬(ばんば)競技大会が開かれ、馬券が発売される

8/24: 戦没者187柱の慰靈祭が行われる。

8/30: 湯内(現在の豊浜町)～出足平(白岩町)間の海岸道路が開通し、沖町から海岸道路が通行できるようになる

9/1: 浜町新生婦人会と青年会が中島グランドで合同運動会を行なう

9/5: 積丹国道の開通式が古平中学校で行われる

同: 海岸道路の開通により、中央バス株が古平～余市間のバス料金を現行の130円から100円に値下げする

9/13: 北後志消防団の演習が、雨の降り続くな中島グランドで行われる

10/1: 副総理・開発庁長官石井光次郎が、建設中の国道と漁港を視察のため来町する

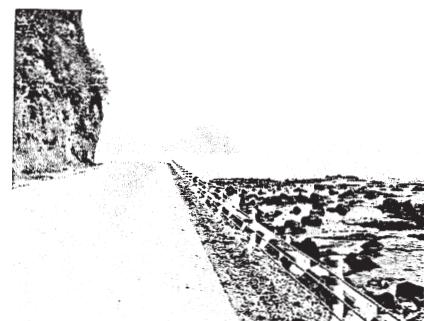
10/5: 古平漁業協同組合信用部の独立店舗が完成し、業務を開始する

10/17: 泥の木川上流の靈場観音瀧祭りが行われたが道路も悪く、参拝者も年々減少する

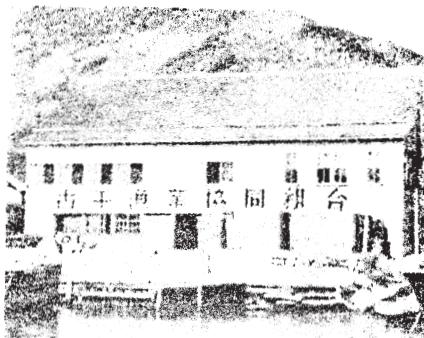
10/18: 古平中学校創立10周年記念式典と祝賀会が行なわれる

10/20: 記念事業としてバザーが開かれる。この日初雪が降り10数センチの積雪となる

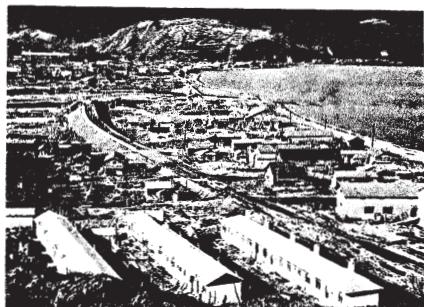
10/-: 沢江村国道沿いにブロック建て公営住宅15戸が完成する



↑開通した頃の沖町への国道



↑古平漁協事務所と市場



↑ブロック建ての公営住宅

★ (10月) ソ連が世界初の人工衛星の打ち上げに成功、世界は驚きアメリカは大ショック。同月、ポリバケツが発売、1200円と高級品並みの値段であった